

社会科（地歴科）の授業を保障する大学入試センター試験

ーセンター試験「世界史」の出題形式と内容の研究ー

中 切 正 人*

1. 問題の背景と本研究の方法・目的

教師の卵達が学び、大学入試センター試験に対応した授業を行う「地方の進学校」では、本来他教科以上に幅広く「考える」ことが重視されるはずの社会科（地歴科と公民科は一括りに社会科とみなされている。）は、いわゆる「英数国理社」という左から右に向かって思考・応用力が減少し、代わって暗記力が強化される序列の最後に位置する教科として認識されている。中でも「世界史」はその筆頭で受験学習とは事項や年代等の「暗記」に他ならないため、学習指導要領に則り「歴史的思考力を培う」授業が成立しにくいばかりか、せっかく覚えた受験の知識は大学入学後すぐに失われやすい。戦後六十年、筆者は今日まで蓄積されてきた社会科歴史教育の実践や理論が、その一つの成果を問われる段階（大学入試）で単なる「暗記物」と化してしまっている現状を危惧し、先に拙稿（2005）^{（1）}を通して以下の点を明らかにした。

まず、地理では様々な素材（統計・グラフ・図等）を元に「地理的思考力」を見る、本来の「選択式（論文体テストに対する客観テストの一部をなす再認形式の一つで、問題を構造化して多肢選択式で答えるテスト形式。）」が機能しているのに対し、素材の極めて少ない「世界史」では「選択式」を装った「再生式（客観テストの一部をなす再生形式の一つで、用語の当てはめなど正解を一義的にしやすく単に事項の暗記を問う皮相な問いに陥りやすいテスト形式。）」が主流である。ただし、基礎科学的な性格ゆえに価値観が入り込みにくい地理と異なり、歴史的思考力には人文科学特有のイデオロギー等に基づく個々の歴史観や価値判断が避けられな

い。したがって、「歴史的思考力」そのものの測定は高等教育の場で論理性を重視した指導を経た上で、長期的スパンにわたる論文体テストとして実施されるべきである。よって、センター試験のような短期的な客観テストでは「歴史的思考力を培う基礎となる学力」の測定に絞ったテストが、「再生式」ではなく「選択式」で実施されるべきであると考え、その学力を測定する問題作成の「指針」を次の5点にまとめた。
①身につけた知識を思い出して当てはめる問題から、それらを使って考える問題を作成する。
②理念型や時代の本質、歴史用語の理解を問う。
③複数の知識や学力を動員し総合的に考察させる。
④年表・統計・史料・地図等の資料を判読させる。
⑤「知識の質」を見極め「知識の身につけ方」を確認する。以上は、評価基準の「思考・判断」、「資料活用の技能・表現」、「知識・理解」に該当するものと考えている。

そして、同じ試験範囲で、「指針」に基づいた「歴史的思考力を培う基礎となる学力」を測る選択式の「試行テスト」問題と、「いつ、どこで、誰が、何を」といったレベルの、事実認識の結果を知識化して身に付けているかどうかを問う応用性・転移性に乏しい学力を測る再生式の「従来型テスト」（現行センター試験を想定したテスト。）問題を作成して試験を実施し、両者の定着度を比較した。その結果、「試行テスト」で測った学力の方が定着度が著しく高いことが明らかとなった。よって、この学力は卒業後も持続し、高等教育においては（自ら課題を設定し）仮説を検証するために情報を収集・分析・考察して結論に至る一連の研究過程に寄与する可能性と同時に、それを育成する高校側

* 岐阜県立斐太高等学校

では資料や年表等が「暗記」から「考察」の対象に変わって、「歴史的思考力を培う」授業が成立する可能性を論じた。

本研究は以上の研究成果の延長線上にある。そこでまず、2006年度新課程入試に向けて2005年度までのセンター試験に新たな分析を加えるとともに今後の出題傾向を予測し、拙稿(2005)では触れられなかった「試験問題作成に不可欠な歴史統計資料集」について調査・分析する。次に、新規に「試行テスト」と「従来型テスト」を作成して試験を実施し、両者の得点率の相関を分析して、「指針」に基づいた「歴史的思考力を培う基礎となる学力」と現行センター試験の測る「記憶に偏重した学力」との関係について考察を深める。そして、以上の結果を元に高校教育の現場から「歴史的思考力を培う授業の成立を保障するセンター試験のあり方」を提案することを目的とする。

2. センター試験「世界史」の分析

(1) 新しい傾向の設問

拙稿(2005)に引き続き2003年度のセンター試験から分析する。2003年度は画期的なことに初見のグラフから読み取りを求める設問が登場した。本試験「世界史B」第4問の間9は、フランスのある地域の洗礼(出産)・結婚・埋葬の件数を示す折れ線グラフを読み取る問題であった。これについてベネッセ(2003)は、「読解力と思考力を問うている点が興味深いが、歴史的知識がなくとも解答できてしまう点が惜しまれる。」⁽²⁾と解説するが、これはセンター試験の現状に囚われた評価である。筆者は、統計グラフを活用しつつ社会史の視点を取り入れ、知識偏重からの脱却を試みた意欲的な設問として高く評価したい。なお、本試験「世界史A」第3問の間1は、拙稿(2005)で示した「試行テスト」の設問Vの間1とほぼ同じもので、工業生産力を指標として列強を判断させる出題意図は筆者と共通したものであった。

さらに、2003年度追試験「世界史A/B」

第1問の間6は、中国近代史の総合的な理解を前提とした上で、上海の共同租界に占める列強の居留民人口の推移を示す統計表を読み取る設問であった。この他、2004年度本試験「世界史A」第3問の間10では、19・20世紀のフランスにおける女性の家庭外労働の変化を示す統計グラフの読み取りが、また、2005年度本試験「世界史A」第2問の間1ではアメリカ移民の出身地の読み取りが出題された。以上「世界史A」を中心に、「資料活用の技能」、「思考・判断」力が測定されるようになった。

(2) 継続される問題点

しかしながら、これらは全体から見れば氷山の一角に過ぎず、基本的に現行センター試験は拙稿(2005)の分析結果を踏襲している。たとえば、年代の暗記が不可欠なことは、代々木ゼミナール(2004)が「歴史学習は年代や年号の暗記から始まります。これなくして、受験世界史はマスターできません。年代を覚えるだけで、直接的・間接的なメリットがあります。」⁽³⁾として例に挙げた、2004年度本試験「世界史B」第1問の間6(指示された事件を5つの年代の隙間に挿入する。)を見れば分かる。それどころか、2006年度新課程入試からネットワーク論にかかわる出題が予想される中、河合塾(2004)は今後ヨコのつながりが今まで以上に重要になることから同時代史の出題を予想している⁽⁴⁾。筆者は、ネットワーク論を単なる同時代史の知識確認に換骨奪胎して、ひたすら年代を暗記した受験生が有利になる出題を懸念している。そもそも年代(年表)は地理における地形図に相当する世界史の基本的素材ではないか。年代は覚えさせるよりも、年表で示してそこから何かを分析・判断・考察させる出題こそ望ましいのではなからうか。

また、2003年度本試験「世界史B」第3問の間3の空欄補充問題(「僭主制」「陶片」をストレートに選ばせる。)に典型的に見られるように、センター試験の主流は依然として「再生式」である。そして、2003年度本試験「世界

史B」第2問の間6ではせっかく「皇興全覧図」の図版が使われていても、そこから何かを読み取るのではなく単に図の名称だけが問われている。さらに、2005年度本試験「世界史B」は戦後史が5問に増加（前年度1問）し、しかも1980年代以降が問われて話題となったが、拙稿（2005）で危惧したように史実の積み重ねが歴史の宿命である以上、戦後史まで網羅する余裕のない教師と現役受験生にとって暗記事項は増大する一方である。2006年度新課程入試でも出題傾向は基本的に変わらないようで、河合塾（2005）はセンターレベルの用語（山川出版社『世界史B用語集』の頻度⑧以上）に焦点を合わせた上で、正誤判定問題に見られる「嘘のつき方」や「クセ」などをつかませる指導を相変わらず推奨している⁽⁵⁾。

以上、拙稿（2005）で指摘したセンター試験の出題形式は2005年度まで継続されており、2006年度新課程入試にも引き継がれるどころか、年代暗記が強化される可能性すらうかがえた。「歴史的なものの見方・考え方」にかかわる論理的思考力や資料の読解力、知識の質等はいまだにほとんど問われないため、予備校のセンター試験対策も「時代別、地域別、分野（政治・経済・文化）別出題割合」といった「知識の出所」の分析・予測に集中している。

3. センター試験「世界史」の具体的提案

(1) 「世界史」における統計資料の偏在

地理では模擬試験や大学入試問題の設問作成等に幅広く活用されている『データブック・オブ・ザ・ワールド』（二宮書店；毎年更新）というコンパクトながら分量的・質的に十分な統計資料集があるが、これは誰でも書店で手軽に入手できる。これに対して世界史の副教材に統計資料集が無いのはもちろん、教科書や資料集の中でも統計部分が極めて少ない。そこで、インターネットや大学図書館で調査したところ、ヨーロッパ編とアジア・アフリカ・大洋州編と南北アメリカ編の3分冊に分かれ、1750年か

ら1993年までの世界全体を極めて詳細に網羅する、B. R. ミッチェル編（2001-02）『マクミラン新編世界歴史統計』⁽⁶⁾が検索できた。また、国勢調査の歴史が古いアメリカ合衆国の統計資料集⁽⁷⁾や、大衆デモクラシーや福祉国家の視点を加えたヨーロッパの資料集⁽⁸⁾も見られた。

しかし、これらの資料集は全て18世紀以降の統計に限られるのである。その背景⁽⁹⁾には、国民国家という統計上の枠組みの成立（課税と軍備）と同時に産業革命以降の資本主義経済の発展に伴う人口・産業等の統計調査の必然性、さらには「近代化理論」に伴う共通の統計指標の認識が横たわっている。しかし、その根本的な理由は20世紀になって社会科学上の全ての分野に計測の原理が持ち込まれたことに尽きるのであって、この学問上の方法論の一大転換が、統計資料をいわばそれ自身の目的のために収集刊行するようになった主因である。したがって、統計的調査の研究は欧米主導で進められてきた。その欧米でさえ、スペインおよび北西ヨーロッパの物価データを唯一の例外として、有効な統計資料は18世紀半ば以降である。いくつかの国については貴金属の産出量や港の商品取引等のデータで中世にまで遡るものが存在するが、それらとてかなり偶然に左右された不完全な資料である。当の欧米の資料がこの状態であるから、欧米を除いて19世紀中頃以前に作成された利用価値のある統計資料を所有している国は、わずかにインド、インドネシア、日本、中国、オーストラリアのみである。また、欧米以外の諸国の資料は実際のところ宗主国の統計資料に頼ることが多いようである。

以上の分析から、世界史には地理の『データブック』に該当する手頃な統計資料集が存在せず、さらに今後、古代から現代までの全ての時代と世界全体をカバーするような統計資料集が刊行され得ないことが分かった。また、今回調査した資料集を活用するにはある程度全体に目を通した上で、必要なデータをかなり加工しな

ければならないことも分かったので、今回の「試行テスト」の作成には使用を見送り、入手しやすい大学入試問題の過去問や市販の副教材等から統計部分を引用・加工することにした。

(2) 具体的提案「試行テスト」の作成

2005年3月に筆者の勤務する「地方の進学校」第2学年後期期末考査で実施した「世界史B（3単位：第2，3学年で分割履修）」の試験範囲は、山川出版社『詳説世界史B』の第6，9，10，11章で、ゲルマン民族の移動からフランス大革命までのヨーロッパ通史である。試験問題は大問1と大問2からなり、大問1は「指針」に基づいて作成した「試行テスト」の部分、大問2はセンター試験タイプの「再生式」を意識して作成した「従来型テスト」の部分で、試験範囲は共通である。大問1で引用した統計資料には問題文中に出典を明記した。以下、大問1について設問毎に「指針」の項目を絡めて出題意図を紹介（以下30頁～34頁の資料参照。）したい。

設問1は「指針」の②③④に該当し、ヨーロッパの15～18世紀の経済の動向を小麦価格の変動から読み取らせる設問で、16世紀の価格革命や商業圏の推移がヨーロッパ経済に及ぼした影響やその背景に対する知識・理解が必要である。あらかじめグラフ内の年代の解説を加えた上で、枝問①では小麦価格の持続的上昇を価格革命として理解しているかどうか、枝問②では東欧の農業生産が西欧経済へ組み込まれていく背景を理解しているかどうか、そして枝問③では大航海時代以降18世紀にかけて商業圏が大西洋に移行した背景を理解しているかどうかを問うた。

設問2の枝問①は「指針」の④に該当し、グラフの読解力を測定した。枝問②は「指針」の②④に該当し、ペストの流行と15世紀のイングランドの人口減少を正しく把握しているかどうかを確認した。設問3は「指針」の②③④に該当し、グラフを正しく読み取って価格革命とスペイン本国の経済政策との関係、およびその

背景にある南米でのインディオの人口激減との関係が正しく理解できているかを確認した。設問4は「指針」の②③④に該当し、史料の内容を吟味して総合的に判断し、世界史を代表する変革にそれぞれ正しく当てはめることができるかどうかを確認した。

設問5と6は「指針」の①③に該当し、使用した模式図は試験範囲内のヨーロッパの大まかな流れを示すために筆者が考案して作成したオリジナルな図である。各時代の王朝名をいちいち問うことなくそれらを明示した上で、同時代の王朝同士の関係を横軸に、同一地域における王朝の変化を縦軸とし、その歴史の重層性にくっつかの切れ目をこしらえることによって、ヨーロッパ史を概観する視点を持っているかどうかを確認した。設問7は「指針」の①②③④に該当し、瑣末な事項や人物を捨象した「革命」の概観を表示する模式図（筆者のオリジナル）の読解を通して、英米仏の革命の本質の一部を理解しているかどうかを確認した。

4. 「試行テスト」の実施と分析・評価

(1) 「試行テスト」の実施と結果の分析

「試行テスト」と「従来型テスト」を含む第2学年後期期末考査は2005年3月10日、第2学年7クラス277名を対象に50分間で実施した。そして、翌日のテスト返却時の20分間に採点ミスのチェックと合わせて、テストの感想を自由記述する簡単なアンケートを施した。今回はポストテストを行っていない。

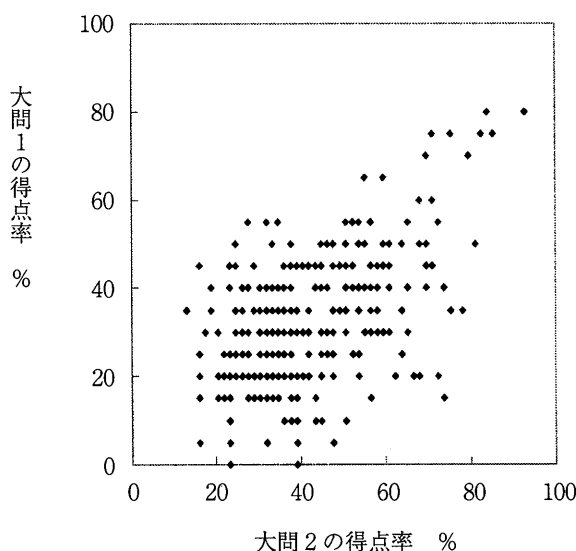
調査対象校では例年100名強の生徒が現役で国公立大学に進学する。対象学年の2年生は志望進路別に緩やかなクラス編成が施してあり、3クラスは第3学年に進級する際に主として文系進学クラスへ、2クラスは理系進学クラスへ、そして残りの2クラスが第3学年で文系・理系のいずれにも進級可能なカリキュラムとなっている。また、文系進学クラスの生徒は「日本史B」を3単位、理系進学クラスは「地理B」を3単位、文理系クラスはそのいずれかを「世界

史B」と合わせて履修し、文系クラスの生徒の大半は「日本史B」、理系クラスの生徒は「地理B」の学習に力を注ぐ傾向が見られた。この学年の「世界史B」の授業担当者は3人で、筆者は文系3クラスを担当し、理系クラスと文理系クラスをそれぞれ別の2人が担当した。3人の担当者は授業進度と定期考査や課題を共通にしたものの、授業の進め方は各自の自由とした。試験結果の分析には、大問1「試行テスト」の得点率（正解率）と大問2「従来型テスト」の得点率をそれぞれ別個に算出してこれを基本データとした。

【表1】は大問1と大問2の得点率の相関係数を出して、相関の高いクラス順にソートした

【表1：大問1と大問2との得点率の相関】

クラス	受験者数	クラス の特性	努力度	大問1と大問2との 得点率の相関係数
*	41	文理系	①	0.76
*	39	文系	②	0.58
*	38	文系	②	0.52
*	40	文理系	③	0.36
*	40	理系	③	0.36
*	39	文系	③	0.28
*	40	理系	③	0.24
全体	277			0.51



【図1：大問1と大問2との得点率の相関】

もので、全体の相関係数「0.51」は前回の試行テストの際に算出した相関係数「0.50」とほぼ同じ数値となった。よって、「試行テスト」と「従来型テスト」との間には今回も弱い相関が認められる。なお、この学年の学年主任として筆者が観察するに、クラスによって学習意欲・努力度に差が見られたため、分析の補助的観点として【表1】で努力度の高い順に①→③として3段階評価を加えてみたが、努力度の高いクラスほど相関が高くなる傾向が見られた。また、入試に「世界史B」をほとんど選択しない理系クラスの相関が低いことにも注意した。

そこで、あらためて【図1】で大問1と大問2の全データの相関を見てみると、得点率の上位の方が下位者に比べて相関の高い様子が見られたため、【表2】で大問毎に上位者50人と下位者50人を分けて、それぞれに対応した大問の得点率との相関係数を算出した。その結果、上位者の相関に比べて下位者の相関が著しく低いことが分かった。

【表2：大問毎の上位者、下位者別相関】

分類	相関係数
大問1の得点率上位50名の生徒の、 大問2の得点率の相関	0.53
大問1の得点率下位50名の生徒の、 大問2の得点率の相関	-0.22
大問2の得点率上位50名の生徒の、 大問1の得点率の相関	0.54
大問2の得点率下位50名の生徒の、 大問1の得点率の相関	0.19

(2) 結果の考察と評価

以上の結果から、「試行テスト」で試験を実施しても「従来型テスト」で試験を実施しても、学習意欲が高くて努力する生徒は得点率が高いことが認められた。この結果は二つの可能性を示唆している。一つは、「従来型」のセンター試験タイプのテストでも、筆者の意図する「歴史的思考力を培う基礎となる学力（「指針」の5つの観点）」が測定できるということであり、

現行のセンター試験を正当化する。その立場を取るならば、既述のように「暗記の世界史」は不変で、センター試験が終わればほとんど忘却される転移性・応用性の低い知識の詰め込み学習が続き、教室でもそれに合わせて「歴史的思考力を培う」授業が成立しにくい現状は変わらないであろう。

もう一つは、「試行テスト」が現行センター試験に代わって大学入学にふさわしい生徒を選別できる可能性であり、これは「歴史的思考力を培う」授業を保障するセンター試験のあり方を提案する本研究の目的に沿うものである。この筆者の立場を取るならば、「歴史的思考力を培う基礎となる学力」を測定するセンター試験に合わせて、授業では枝葉末節な事項に拘泥されず、年表が暗記から考察の対象に変わり、資料を活用した授業を通して「歴史的思考力を培う」授業が可能となるであろう。そうなれば、教室では解説重視の講義式授業を離れて討論形式や発表形式の授業を試みやすくなり、年表や資料を判読・考察して多様な歴史像を構築したり、多面的な世界史観を追究したりすることが容易になろう。

最後に生徒のアンケート結果をご覧いただきたい。全体的に大問2の「従来型テスト」は選択肢が多すぎるとの批判が目立った。大問1の「試行テスト」は総じて「難しすぎる」という評価であったが、好意的な意見もあったので以下に抜粋して紹介したい。「語句の暗記だけでは解けなかった。文が多くて混乱した。」「その時代の経済とか流れを理解して、考えて解かなければならない。」「考えさせる問題で難しかった。知識と読み取る力が双方必要な問題だった。」「グラフを見ても、その時代のことが分かっていないと解けなかった。」「グラフが出てくるとは思わなかった。グラフの読み取りは結構好きだが、世界史の知識も要るので参った。」「全体的につないで考える問題も大切だと思った。」「こういう問題は、一つ一つの事項や名前や年号だけ覚えていても全然歯が立たない。重

要事項と歴史の流れをまとめて覚えることが必要だと思った。」「覚えつつもりでも、こんな形式で出題されると難しくて分からなかった。でも、勉強して理解した人には取れるので良い問題だと思った。」「暗記だけでは解けない。設問7の革命の模式図のように歴史をまとめるまとめ方があることがわかって参考になった。」「難しかったけど、世界史の知識を使って、いろいろ予想したりして面白かった。」「同時代史を模式図で示した問題はすばらしい。調べたり考えたりする世界史の授業をお願いします。』

5. まとめと今後の課題

本研究によって、大学入試センター試験「世界史」では「再生式」の出題が継続されている現状が確認され、加えて2006年度新課程入試以降はネットワーク論に絡んで年代記憶の比重が増大する可能性が浮上してきた。また、「世界史」ではコンパクトで手軽に入手できる統計資料集が無いことが新たに分かったため、限られた素材を元に拙稿(2005)の「指針」に基づく「試行テスト」を作成し、現行センター試験タイプの「従来型テスト」と合わせて試験を実施し、実証的データを得ることにした。その結果、成績上位グループはどちらの得点率も高いことが分かった。

本研究は、拙稿(2005)で得た結論(「指針」に基づく「歴史的思考力を培う基礎となる学力」は定着度が高く、転移性・応用性が期待できる。)を受けて、この学力と現行センター試験を想定した「再生式」の「従来型テスト」が測る学力との相関に焦点を当てて分析と考察を試みたわけであるが、その結果、学習意欲が高く努力する生徒については両方の学力の間に弱い相関が認められることが明らかとなった。つまり、筆者の作成した「試行テスト」は現行センター試験に代わり得るテストであると同時に、裏を返せば、現行センター試験が暗記力だけでなく、筆者の測定しようとしている多様な学力も合わせて測定している可能性が確認され

たことになる。よって、「再生式」の現行センター試験でも高等教育に資する学力を測定している可能性が認められるため、大学サイドから見れば現状維持に不都合は無いと結論することも可能である。

しかしながら、現場サイドでは前項の「(2)結果の考察と評価」で論じたように、現行センター試験のままでは「歴史的思考力を培う」授業が成立しにくい。そこで筆者は「歴史的思考力を培う」現場の授業を保障するために、現行センター試験に代えて、現行センター試験で測る学力との相関が認められる「試行テスト」のような、「歴史的思考力を培う基礎となる学力」を測る「選択式」のテストを実施していただけるように、大学入試センターに対し改善策を提起して本研究のまとめとしたい。

ただし、今後の課題として、本研究で作成した「試行テスト」は問題文や資料の提示の仕方など荒削りで改定の余地が多いため、多方面からの批判を受けながら洗練された設問に仕上げていかなければならない。また、本研究で調査した統計資料集の有効活用も今後の課題であり、そして何よりも年表を素材とした設問の作成も急ぎたい。さらに、古代・中世史など統計資料を得にくい分野については、専門的な立場から資料を提供していただいたり、ネットを通じて幅広く模式図や歴史の流れを確認できる素材を集めて充実させたり、誰でも利用できる世界史試験問題作成のデータベースを構築したりするなど、センター試験改善のための活動の輪を広げていく必要性を痛感している。

【注】

(1) 拙稿(2005)「地歴科(社会科)の授業を保障する入試問題のあり方—大学入試センター試験「世界史」の批判的研究—」(『日本高校教育学会年報』第12号, 日本高校教育学会)

(2) ベネッセ(2003)『進研ニュース VIEW21 特集号 2003 年度センター試験徹底分析』ベネッセ. p 113.

(3) 代ゼミ(2004)『大学受験アルファ秋号通巻 347 号』代ゼミ. p 28.

(4) 河合塾(2004)『「2006 年度入試を考える」研究会分析資料集』河合塾. P411.

(5) 河合塾(2005)『2006 年度新課程入試受験指導法の指針「地理歴史・公民」』河合塾. p32.

(6) B. R. ミッチェル編(2001), 中村宏他訳『マクミラン新編世界歴史統計〔1〕ヨーロッパ歴史統計: 1750 ~ 1993』東洋書林. B. R. ミッチェル編(2002), 北村甫監訳『マクミラン新編世界歴史統計〔2〕アジア・アフリカ・大洋州歴史統計: 1750 ~ 1993』東洋書林. B. R. ミッチェル編(2001), 齊藤眞監訳『マクミラン新編世界歴史統計〔3〕南北アメリカ歴史統計: 1750 ~ 1993』東洋書林.

(7) アメリカ合衆国商務省編(1986-87), 齊藤眞他監訳『アメリカ歴史統計(第1巻, 第2巻, 別巻)』原書房.(1999年に3巻の新装版が東洋書林から出版。植民地時代~1985年の統計資料集。)齊藤眞氏は「あとがき」で, アメリカでは1790年から国勢調査が始まり10年毎に更新されてきたが, ターナーのフロンティア学説はこの賜物であり, 歴史が統計を生むと共に統計が歴史を作る面を指摘している。

(8) P. フローラ編(1985-87), 竹岡啓温監訳, 『ヨーロッパ歴史統計 国家・経済・社会 1815-1975(上下巻)』原書房.

(9) 以下の「背景」の記述は, B. R. ミッチェル編(2001-02)前掲書3冊のそれぞれの「序文」を参照した。

【資料: 第2学年後期期末考査】

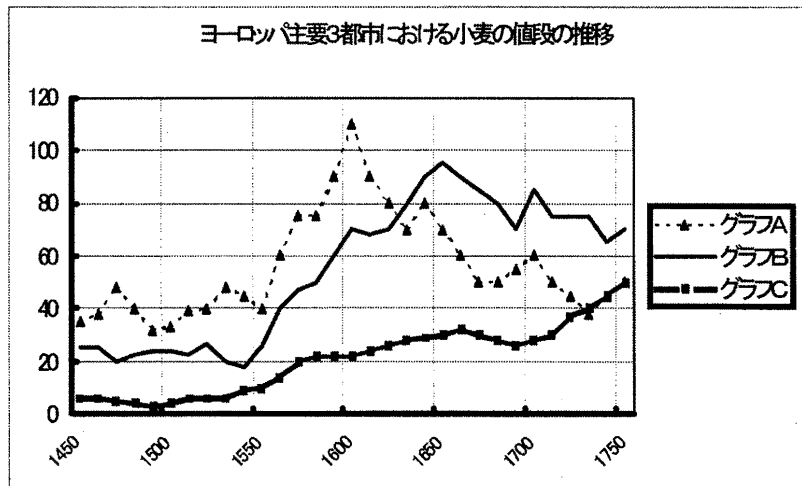
*大問1(「試行テスト」)の全部と大問2(「従来型テスト」)の一部。

警告 このテストは<1>の応用的問題と<2>の基礎的問題の

二つの大問に分かれている。各自時間配分に気をつけて解答すること。

<1>以下の間に答えよ。

1. 次の図はヨーロッパ各地の生活物資の代表として小麦の値段を集成したグラフである。横軸は期間で、大航海時代に先立つ1450年から産業革命に先立つ1750年までを示し、縦軸は小麦100リットル当たりの値段を銀の重量(グラム)で表す。グラフAは地中海沿岸、グラフBは北西ヨーロッパ、グラフCは北東ヨーロッパをそれぞれ代表する都市における小麦の値段の変動を示している。



さらに、17世紀前半まではグラフAがヨーロッパの小麦の値段の最高値に相当し、それ以降はグラフBが最高値を大体示すと同時に、グラフCがヨーロッパの小麦の値段の最低値をほぼ示している。設問①～③に答えよ。

- ①: このグラフに示された歴史事象を示す歴史用語として最も適当な言葉を選べ。(ホ)

(イ) 商業革命 (ロ) 農村革命 (ハ) 流通革命 (ニ) 経済革命

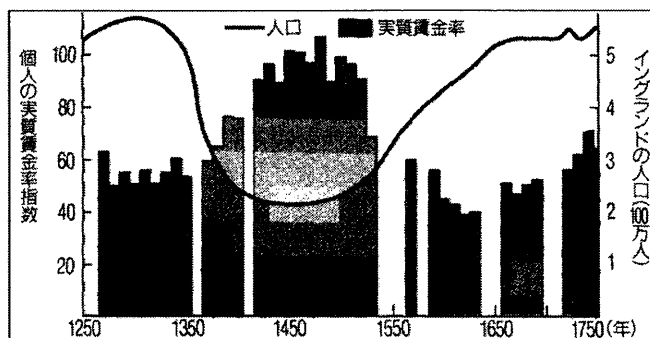
(ホ) 価格革命 (ヘ) 農業革命

出典:「東大前期世界史 1999」から作成

- ②: 1450年における小麦の最高値と最低値との比は6.8であったが、1750年の小麦の最高値と最低値との比は1.8に縮小している。このことの原因にはどのような変化があったと考えられるか。正しい説明文を選べ。(イ)
- (イ) 15世紀のヨーロッパでは個別に独立して存在した経済圏が交流を始めて18世紀には互いに結びつきを強め、東欧ではグーツヘルシャフト(農場領主制)で生産される穀物が西欧へ輸出されるようになり東西の分業体制が進んだ。
- (ロ) ヨーロッパでは絶対主義諸国家が成長し、互いに戦争に明け暮れた反面、フランスやドイツの有力な西欧諸国が東欧の支配に相次いで成功し、東欧を穀物生産の場にして農産物を運んだ。
- (ハ) 西欧諸国が海外に進出して植民地を拡大し、新大陸から大量で安価な香料・綿布がヨーロッパに流入した結果、穀物価格は急落しヨーロッパ内部の弱小農家の経営は行き詰まった。
- (ニ) 17世紀末から18世紀にかけて中国やインドとの交易活動が高まると、東欧諸国の各地に貿易の拠点が生まれて東方の穀物も大量にヨーロッパ諸国に流入するようになった。
- ③: グラフAとグラフBとグラフCの変動を元に、この図の期間内のヨーロッパの商工業と農業をめぐる地域間の関係について述べた次の文のうち最もふさわしいものを選べ。(イ)
- (イ) 大航海時代以降、地中海・バルト海沿岸の商業圏の相対的地位が低下し、大西洋沿岸に経済の中心が移行して、英仏が互いにしのぎを削って世界に進出する気運が高まった。
- (ロ) 初めはイタリアを中心に繊維や皮革製品を中心とした家内工業が発展して西欧が南欧の台所となり、やがてその関係が逆転すると東欧が南欧に代わって穀物供給の中心地域となった。

2. 次のグラフは、13世紀～18世紀のイングランドの人口と個人の実質賃金率指数を示している。このグラフに関する以下の設問に答えよ。

出典：東書「図説世界史」p 111



①：このグラフからは読み取ることができない内容を選べ。(二)

(イ) 人口は必ずしも現代に近づく

に従って上昇するわけではなく、地域によっては半減以上の大幅な減少を伴う時代がある。

(ロ) 低人口時代には実質賃金率指数が上昇しているが、これは労働力の不足によって需要と供給のバランスが崩れたことによるものと考えられる。

(ハ) 17世紀になって人口が増え始めると実質賃金率指数が減少している原因としては、単に人口増加だけではなく、産業革命や第二次囲い込みの影響も考慮しなければならない。

(ニ) 1650年頃から人口が増加せず一定を保つので、現在のイングランドの人口も同程度の人口であると推定できる。

②：このグラフに示された14世紀～16世紀の人口動態を説明する文として最もふさわしいものを選べ。(ロ)

(イ) 人口の低下は、宗教改革に伴う宗教戦争による死亡者の増加と、それによる人口のイングランドからの流出を示している。

(ロ) 14世紀中ごろの人口激減は、ペストの流行による死亡者を示している。

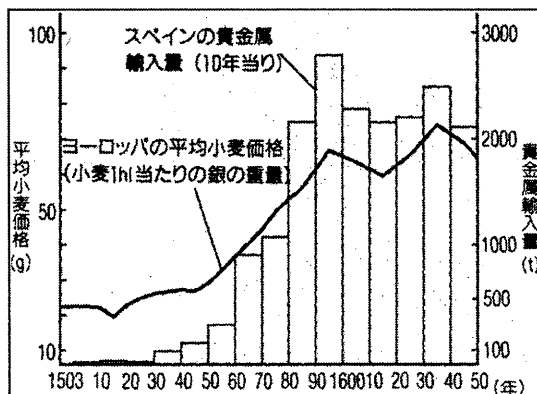
(ハ) 人口の低下は、大航海時代の到来で人々がこぞって海外へ流出した状況を示している。

(ニ) 16世紀からの人口増加は、百年戦争によってフランスから引き上げてきた流入人口を示している。

3. 右のスペインの貴金属の輸入量とヨーロッパの平均小麦価格のグラフについて、

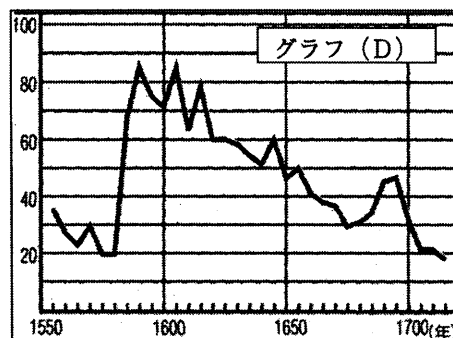
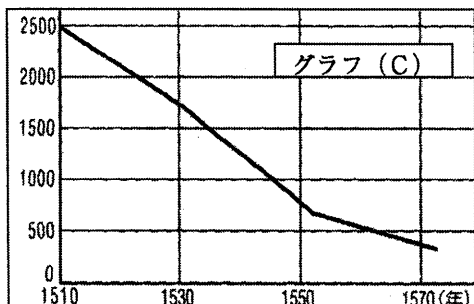
①：下の(A)と(B)の説明文から正しい文を選び、さらに、下の2つのグラフ(CとD)から、ポトシ銀山(ボリビア)の銀産出量を示すグラフを選び出し、正しい文とグラフの組合せを次ページの選択肢から選んでその記号を答えよ。(ロ)

(A) 物価の上昇はスペインの貴金属輸入量の増加に対応しているため、ヨーロッパで16世紀に貨幣価値が下落した原因として、スペインの経済政策を想定することができる。



出典：東書「図説世界史」p 115,7

(B) 16世紀初頭に比べて、17世紀になると小麦価格は6倍以上の上昇を示していることから、スペインの貴金属輸入の舞台となったレヴァント貿易(東方貿易)が物価の上昇をもたらしたと言える。



②: 上の①の解答で使用しなかったグラフが示している内容として最もふさわしいものを下から選べ。(ハ)

- (イ) アフリカから南米へ流出した黒人奴隷人口
- (ロ) インドから南米へ流出したインド人奴隷人口
- (ハ) 南米のインディオの人口
- (ニ) 新大陸から流出したインディオの人口
- (ホ) 新大陸に移住したスペイン人の人口
- (ヘ) スペインから来訪した交易船の数

4. 次の3つの文献資料はある歴史的事件にちなんだもので、そのうちの一つはその事件の結果としては残念ながら日の目を見なかったものである。それぞれの文献に強いかわりを持つ事件名とこの文献にかかわりの深い人物の正しい組合せを選択肢から選んで答えよ。上から(レ、カ、リ)

	事件名	人物名
(イ)	ピューリタン革命	カルヴァン
(ロ)	ピューリタン革命	トマス＝ジェファソン
(ハ)	ピューリタン革命	ミュンツァー
(ニ)	ピューリタン革命	クロムウェル
(ホ)	ピューリタン革命	シェイェス
(ヘ)	アメリカ独立革命	カルヴァン
(ト)	アメリカ独立革命	クロムウェル
(チ)	アメリカ独立革命	マキアヴェリ
(リ)	アメリカ独立革命	トマス＝ジェファソン
(ヌ)	アメリカ独立革命	ミュンツァー
(ル)	フランス革命	ハーグリーヴズ
(ヲ)	フランス革命	クロムウェル
(フ)	フランス革命	ラファイエット
(カ)	フランス革命	シェイェス
(ヨ)	フランス革命	トマス＝ジェファソン
(タ)	宗教改革	シェイェス
(レ)	宗教改革	ミュンツァー
(ソ)	宗教改革	ハーグリーヴズ
(ツ)	宗教改革	マキアヴェリ
(ネ)	宗教改革	カルヴァン
(ナ)	産業革命	ラファイエット
(ラ)	産業革命	マキアヴェリ
(ム)	産業革命	クロムウェル
(ウ)	産業革命	シェイェス
(ノ)	産業革命	ハーグリーヴズ
(オ)	ルネサンス	フランクリン
(ク)	ルネサンス	カルヴァン
(ヤ)	ルネサンス	ミュンツァー
(マ)	ルネサンス	マキアヴェリ
(ケ)	ルネサンス	ラファイエット

出典：東書「図説世界史」付録史料集 p 20,21

	正しい説明文	正しいグラフ
(イ)	A	C
(ロ)	A	D
(ハ)	B	C
(ニ)	B	D

A 第3条 第3に、私たちが農奴と考えるのが従来からの習慣であったが、それは、キリストが尊い血を流して、私たちすべてを、羊飼いで身分の高い人でも同様に例外なく解放し、贖いたもうたことを思えば、たいへんひどいことである。したがって、私たちが自由であり、自由であろうと望むことは、聖書からも明らかとなることである。……あなたがたが真の正しいキリスト教徒として、私たちが農奴の身分から喜んで解放してくださるか、そうでなければ、私たちが農奴であることを福音書によって教えてくださるであろうことを、私たちは疑わない。

B 本書の目論見はきわめて簡単で、ただ三つの問題を取扱うつもりである。それは、1. 第三身分とは何か。すべてである。2. 今日までその政治的地位はいかなるものであったか。零。3. それは何を求めるか。そこで相当なものになること。これらの解答の正否がやがて明らかにされるであろう。それに関連して私は第三身分が現実に相当な存在になるために今までいかなる方策を講じなければならぬかを検討しよう。従って次のことがらにも説き及ぼすことになるであろう。4. 第三身分のためと称して諸大臣が今までに試みたことがら、並びに、特権身分が自ら提案したことがら。

C

(b) 国王は、人間性そのものに反する残忍なたかきをおこない、いまだかつて、かれに逆らったことのない僻遠の地のひとびと(アフリカ黒人)の、生命と自由という最も神聖な権利を侵し、かれらを捕らえては西半球の奴隷制度のなかに連れこんでしまうか、あるいは運搬の途上にて悲惨な死にいたらしめた……(人間が売り買いされなければならないような市場を、あくまでも開放しておこうと決意して、この憂うべき取引の禁止ないしは制限を企図したあらゆる法律の成立を妨げるために、かれは、拒否権を行使してきたのである。)

5. 次の模式図は、左端の「原型(地域の位置)」の図に示すように、ヨーロッパを大まかに6つの地域に分けて、ある世紀におけるそれぞれの地域で有力な国家や王朝が記されている。

①: 原型に続くA B C Dの4枚の図は、7世紀、10世紀、11世紀、13世紀のうちのいずれかを示している。4図の中で十字軍が行なわれなかった時代を示す模式図の記号A B C Dの正しい組

み合わせを下の選択肢から選べ。(ホ)：Aは10世紀、B11、C7、D13

(イ) AとBとC (ロ) AとCとD (ハ) BとCとD (ニ) AとB (ホ) AとC

(ヘ) AとD (ト) BとC (チ) BとD (リ) CとD (ヌ) 該当なし

②：レコンキスタ(国土回復運動)などによって、イスラム勢力が模式図の全ての地域から一掃された時代の模式図があればその模式図の記号を答え、なければFを記入せよ。 F

原型(地域の位置)			A			B			C			D		
北欧	ドイツ、オーストリア	ロシア	デンマーク王国	神聖ローマ帝国	キエフ公国	デンマーク王国他	神聖ローマ帝国	キエフ公国		フランク王国		デンマーク王国他	神聖ローマ帝国	キプチャク=ハン国
イギリス	フランス	東欧	イングランド王国	西フランク王国=カペー朝	ポーランド王国他	ノルマン朝	カペー朝	ポーランド王国、ハンガリー王国	アングロ=サクソン七王国		アヴァール	プランタジネット朝	カペー朝	ポーランド王国、ハンガリー王国他
スペイン	イタリア	バルカン	後ウマイヤ朝	神聖ローマ帝国	ビザンツ帝国	カスティーリヤ王国他、ムワッヒド朝	神聖ローマ、教皇領、両シチリア王国	ビザンツ帝国	西ゴート王国	ランゴバルド王国	ビザンツ帝国	カスティーリヤ王国他、ナスル朝	神聖ローマ、教皇領、ナポリ王国	ビザンツ帝国(一時ラテン帝国)

③：百年戦争の時代の模式図があればその模式図の記号を答え、なければFを記入せよ。 F

④：A B C Dの4図を7世紀→13世紀に時代順に並べた時の正しい組合せを下から選べ。(ワ)

(イ) ABCD (ロ) ABDC (ハ) ACBD (ニ) ACDB (ホ) ADBC

(ヘ) ADCB (ト) BACD (チ) BADC (リ) BCAD (ヌ) BCDA

(ル) BDAC (ヲ) BDCA (ワ) CABD (カ) CADB (ヨ) CBAD

(タ) CBDA (レ) CDAB (ソ) CDBA (ツ) DABC (ネ) DACB

(ナ) DBAC (ラ) DBCA (ム) DCAB (ウ) DCBA

6. 次のABCの3枚の模式図は、5の模式図と同様の形式で16世紀、17世紀、18世紀を記している。

①：模式図Bにある「グレート=ブリテン王国」の王朝名を下から選べ。

(イ) ホーエンツォレルン朝

(ロ) ハノーヴァー朝 (ハ) ランカスター朝 (ニ) ヨーク朝 (ホ) エリザベス朝 (ロ)

②：3図のうち、バステューヌ牢獄の襲撃が起こった時代はどれか、A B Cの記号で解答せよ。

ただし、該当する模式図が無い場合はFを記入せよ。 B

③：3図を16世紀→18世紀の時代順に並べた時の正しい組合せを下の選択肢から選べ。(ホ)

(イ) ABC (ロ) ACB (ハ) BAC (ニ) BCA (ホ) CAB (ヘ) CBA

主な主張	大まかな支持層	A:革命前夜	B:革命開始時	C:革命の途中①	D:革命の途中②	E:革命の終盤	F:革命後
絶対主義(絶対王政)	特権身分 貴族・聖職者等						
立憲君主制	上層市民、 大地主等						
補償共和制	中層市民、 親方・自営農民等						
急進共和制	職人・徒弟・ 労働者・小作農、 等社会の底辺層						

7. 上の模式図は「フランス革命(ナポレオン登場直前まで)」と「イギリスの革命」と「アメリカ独立革命」の流れを示す。矢印①②③は「A：革命前夜」～「F：革命後」までの大まかな時期区分において、それぞれの中心勢力となっていた層にスポットを当て、その主な主張や主要な支持基盤を縦軸にして革命の流れを示そうとしている。

	フランス革命	イギリスの革命	アメリカ独立革命
(イ)	①	②	③
(ロ)	①	③	②
(ハ)	②	①	③
(ニ)	②	③	①
(ホ)	③	①	②
(ヘ)	③	②	①

- ①：図中の①②③の矢印はどの革命を模式的に示したもののか、その最も適切な組合せを右の選択肢から選べ。(イ)
- ②：上の革命の模式図からの読み取り内容として、最もふさわしくないものを選べ。(ハ)
- (イ) 矢印②の革命では王党派が途中で勢力を盛り返したが、結局王制を温存した形で市民層の支配する政治形態になった様子が分かる。
- (ロ) どの革命も、特権身分の独占的支配体制が覆されて、世の中の階層秩序や仕組みが変化した様子を想像できる。
- (ハ) 矢印②の革命を除いて、支配勢力が全面的に中層市民層に移行した結果から、ブルジョワジーの政権獲得には資本主義の成立が不可欠であることが分かる。
- (ニ) 矢印①の革命では、政権の支持が社会の底辺層にまで広がったため、党派の対立が混迷を深めて革命の進展が一筋縄では行かず、複雑な様相を呈していることが想像される。
- ③：上の革命の模式図にある「急進的共和制」を主に主張するグループとして最も適当な党派を下の選択肢から選べ。(チ)
- (イ) ジロンド派 (ロ) 独立派 (ハ) 連邦派 (ニ) フイヤン派 (ホ) 平民派
- (ヘ) 王党派 (ト) 反連邦派 (チ) ジャコバン派(狭義の) (リ) 長老派

<2>以下の問いに答えよ。

1. インド=ヨーロッパ語族のうち、4世紀後半の民族大移動の始まる前から北西ヨーロッパに住み着いていた人々を下から選べ。(ロ)

(イ) ゲルマン人 (ロ) ケルト人
(ハ) スラブ人 (ニ) ラテン人

2. 次の民族大移動の地図上の移動経路で示した民族(a)～(g)のうち、a b e gの民族名を下から選べ。(ト) (ホ) (ハ) (イ)

(イ) 東ゴート (ロ) 西ゴート

(ハ) ヴァンダル (ニ) マジャール

(ホ) フランク (ヘ) アヴァール (ト) アングロ=サクソン (チ) ブルグンド

3. 次の説明文に最も関係するローマ教皇を下の語群から選べ。(ニ)

A：800年、カール大帝に帝冠を授け、西方キリスト教会と世俗権力との結びつきを図った。

B：クレルモン宗教会議を開いて十字軍派遣を決議した。(ロ)

C：「教皇は太陽、皇帝は月。」と形容され、13世紀に教皇権は絶頂期を迎えた。(ヘ)

D：クリュニー修道院出身で、聖職売買や聖職者の妻帯を禁じ、聖職者を任命する権利を世俗権力から教会の手に取り戻して教皇権を強化しようとした。(ハ)

E：フランス国王フィリップ4世に捕らえられて、アナーニ事件をきっかけに憤死し、これ以降教皇のパピロン捕囚と呼ばれる時代が続いた。(ホ)

(イ) ピウス2世 (ロ) ウルバヌス2世 (ハ) グレゴリウス7世 (ニ) レオ3世
(ホ) ボニファティウス8世 (ヘ) インノケンティウス3世 (ト) ヨハネス12世
(チ) カール5世 (リ) ヨハネ=パウロ2世 (ヌ) ヘンリ7世

4. 次の事項に最も関係する人物を下の選択肢から選べ。

A：神聖ローマ帝国初代皇帝 (イ)

B：ビザンツ帝国最後の皇帝の姪と結婚し、初めてツァーリと自称 (ホ)

C：コンスタンツ公会議で火刑となったベーメンの宗教改革の先駆者 (ル)

D：教皇インノケンティウス3世に破門され、マグナ=カルタを承認 (ヲ)

(イ) オットー1世 (ロ) アルフレッド大王 (ハ) クヌート (ニ) ユスティニアヌス大帝
(ホ) イヴァン3世 (ヘ) イヴァン4世 (ト) ワット=タイラー (チ) ジャックリー
(リ) フィリップ2世 (ヌ) ウィクリフ (ル) フス (ヲ) ジョン王 (ワ) フィリップ4世

*以下、大問<2>の途中ですが紙面の関係で割愛します。